都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問いあわせは

都留文科大学附属図書館
住所：402山梨県都留市田原三丁目8番1号
電話：0554-43-4341(代)
FAX: 0554-43-9844
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

電子紀要トップへ

W. P. キンセラの研究
―『シューレス・ジョー』における夢と現実―

A Study of W. P. Kinsella
―Dream and Reality in *Shoeless Joe*―

依　藤　道　夫
YORIFUJI Michio

Summary

“Baseball novels” occupy not a little important place in the world of modern American literature. And W. P. Kinsella, a Canadian novelist, is one of the most well-known writers of that genre. His most famous masterpiece is *Shoeless Joe* which is the story of Joseph Jefferson Jackson, a very legendary but tragic baseball player of Chicago White Sox.

In this novel Kinsella tries to describe his very nostalgic dream through the small baseball stadium which Ray Kinsella (the author's alter ego) has built in his corn field where the phantoms of Shoeless Joe, his colleagues and Moonlight Graham and Ray's father, etc., play baseball games. This paper is to make it clear that W. P. Kinsella has looked for the classical heroism and idealism, recollection of the brilliant and sentimental past, mutual understanding and friendship among people through the analysis of the plot of *Shoeless Joe* and the examination of the theme of it.

1.

いわゆる「野球小説」というジャンルは、アメリカ文学、特に現代アメリカ文学の世界においては特異な一角を占めている。それは、野球（baseball）というスポーツが、アメリカ社会、いや、アメリカ文化の中においてさえも、単なる一娯楽、一スポーツ以上の存在として定着していること、アメリカ人の心に妙に懐かしく、郷愁さえ呼び起こすスリリングで楽しくも、味わい深い存在として深く根を下ろしていることと無関係ではない。つまり、「野球小説」と言う時、それは、他の分野のスポーツ小説の場合とはかなり違って、アメリカ人にとり独特の響きを伝えている。すなわち、野球小説は、野球（ベースボール）や野球選手を中心的に描きながらも、しばしばそれ以上のもの、言ってみれば、野球や野球選手に事寄せつつ、或いは野球や野球選手という題材を借りつつも極めて精神性の色濃い、一般的な人生や人間の諸問題を扱っていると言える。しかも特別にアメリカらしい人生や人間の諸問題をである。そして、アメリカ人は、そうした物語を通じて、人生の喜びや悲しみ、人間の心の機微や人間存在の奥深い意味などを味わうのである。

アメリカにおいて、野球（ベースボール）はそうした作家たちの営みに耐え得る力を秘めた題材であり、

そうした営みの中で優れて意義深い媒体となり得る性質のものなのである。

W. P. キンセラ（William P. Kinsella, 1935―）は、かかる分野の代表的な作家の一人である。ただし、彼はカナダ人である。カナダのアルバータ（Alberta）州の首都エドモントン（Edmonton）の生まれである。

アメリカの野球小説の世界では、たとえば、古くはリング・ラードナー（'Ring'（Ringgold Wilmer）Lardner, 1885―1933)、比較的新しいところではバーナード・マラマッド（Bernard Malamud, 1914―）などがあげられるが、キンセラは、カナダ出身ながらも、彼ら以上に野球に"没頭"している節が見受けられる。そしてキンセラの文学経歴において、野球小説は重要な両輪のうちの一輪であり、日本においては、そして多分アメリカにおいても、彼はまず野球小説の作家としての名が通っていると言える。

キンセラの他の一輪は、カナダ・インディアンを描いた沢山の大変ユーモアに富んだ奇抜な短篇小説である。この種のもので、今日までに6つの短篇集が出版されている。

日本でも野球小説とカナダ・インディアンを描いた短篇集が数編ずつ既に永井淳氏や上岡伸雄氏等の手により、翻訳出版されていて、キンセラの名前が浸透しつつある状況にあるのである。

なお、キンセラの野球小説の分野には長篇『シューレス・ジョー』（*Shoeless Joe*, 1982）や『アイオワ野球連盟』（*The Iowa Baseball Confederacy*, 1986)、それに短篇集『芝の感動』（*The Thrill of Grass*, 1984, 邦訳題名『野球引込線』）などがある。また、カナダ・インディアンものとしては『ダンス・ミー・アウトサイド』（*Dance Me Outside*, 1977）や『フェンスポスト年代記』（*The Fencepost Chronicles*, 1986, 邦訳題名『インディアン・ジョー―フェンスポスト年代記』）などがあげられる。キンセラの経歴の中では、カナダ・インディアンもののほうがその始まりが古いようであるが、ともかく、キンセラが野球や野球小説に示す情熱には大変なものがあり、彼が文学における野球というテーマの、野球小説のなし得ること、その可能性を一層高め、その領域を一層拡大せしめつつあるということは誰にも否定できないことである。

2.

『シューレス・ジョー』は、短篇「シューレス・ジョー、アイオワに来る」から発展したものである。この長篇『シューレス・ジョー』は、一見青春小説的な側面を有するキンセラの諸作品の中でもとりわけ夢多い作品であるが、普通の場合、いわゆるイニシエーション的な作品は、往々にして、夢が現実の壁の前に挫折してゆく、というパターンを見せるのであるが、キンセラのこの作品は、作者自身の夢を思い切り広げ、それをのびやかに、と言ってもノスタルジックな感傷性も合わせ秘めつつ、ということなのではあるが、やはりのびやかに生かし切っているというところが非常に印象的であり、かつ感銘深い。同時にこれには不思議な気持にもさせられる次第である。

『シューレス・ジョー』の世界には、想像を絶する奇想天外さと余りな日常的現実感覚とが同居している。と言うより、融合している。しかもそれが不自然でなくて、である。そういう意味で、夢が見事に生かし切られているのである。

キンセラは、アイオワ州東部の農場でお告げのような球場のアナウンサーの声（the voice of a ballpark announcer）を聞いた主人公に自身のトウモロコシ畑の一部分をつぶ

して芝生や照明、レフト・スタンドを備えた自前の野球場を作らせる。農夫としては死活的に重要な畑であった。それは、往年の野球の名選手シューレス・ジョー・（ジョゼフ・ジェファスン）・ジャックスン（Shoeless Joe（Joseph Jefferson）Jackson, 1887―1951）をはじめとする、例の1919年のブラック・ソックス・スキャンダル（Black Sox Scandal）事件（ワールド・シリーズの八百長事件）で球界から永久追放された大リーグのシカゴ・ホワイト・ソックス（Chicago White Sox）の「不運な 8 人」（unlucky eight）の名選手たちややはり大リーグのニューヨーク・ジャイアンツ（New York Giants）で第リーガーとして1905年 6 月29日の試合にライトの守備でたったの一イニングしか登場しなかった（打席に入るチャンスは全くなかった）ムーンライト・（アーチボルド・ライト）・グラハム（Moonlight（Archibald Wright）Graham）などをその自前の球場に再び登場させるためである。

因みに、「シューレス」と言うわけは、レイの父が子供のレイに教えたところによると、彼（ジョー）がまだマイナー・リーグにいた頃、新しいスパイクをはいたら足が痛くなり、6 回頃にスパイクを脱ぎ、ソックスだけで外野の守備についたので、他の選手がからかって「シューレス・ジョー」と言ったところからついたニックネームだということである。

また、キンセラは、主人公をして、ニューハンプシャー（New Hampshire）に隠栖中の有名作家、『ライ麦畑の捕手』（*The Catcher in the Rye*, 1951）の作者ジェローム・デヴィッド・サリンジャー（Jerome David Salinger, 1919―）を“拳銃”で誘拐（ゆうかい）させて、アイオワの野球場まで連れて来させたりもする。

このような設定というか手法はまことに奇抜な着想に基づくものであって、下手をすると作品世界のすべてを台無しにしかねないところである。にもかかわらず、作者はこうした奇想天外なことをいとも気楽にさらりとやってのける。しかもその過程で怖気づくところなどまるでないのである。

思うに、キンセラの野球に対する童心の如き真っ正直な気持、情熱そして愛着、ひいては彼の人間の心の真実を求めんとする無欲な姿勢が、すべての一見したところは「無理な設定」を生かし切らせているのであろう。「不運な 8 人」、とくにシューレス・ジョー選手への少年らしい純粋な想いが、またムーンライト・グラハム選手への熱いストレートな想いが、それを生かし切っているのであろう。そもそも、キンセラが自身の分身と思われる同姓の主人公レイ・（レイモンド）・キンセラ（Ray （Raymond） Kinsella）にトウモロコシ畑をつぶさせるきっかけとなったものは、球場のアナウンサーのような声がレイに語りかけた言葉「もし君がそれを作れば、彼はやって来る」（If you build it, he will come.）であった。「彼」（he）というのはむろんシューレス・ジョーのことである。そしてこの言葉は、かつてあの八百長事件のあと、一少年ファンがジョーに向かって言ったという言葉「うそだと言ってよ、ジョー」（“Say it ain't so, Joe”）に関わるものなのである。この一少年ファンの言葉は、当時の全米の野球ファン、それもとりわけ少年ファンたちの強い願いを込めたもの、集約したものでもあったろうし、また今日に至るまで、作者キンセラ自身を含めて野球ファンたちの心奥の願望、祈りであり続けているものでもあると言えよう。つまりは、キンセラのこの小説の発想の源は、この一少年ファンの発した言葉に由来するものと考えてよいのである。

作中に横溢するキンセラの理想主義的だが純粋無垢な心情は、サリンジャーや彼の『ラ

イ麦畑の捕手』の主人公ホールデン・コールフィールド（Holden Caulfield）のそれにも通じるものなのである。

3．

『シューレス・ジョー』には、創作文学にしては意外なほどの現実も混入している。まず、主人公のレイ・キンセラからしてそうである。彼は作者キンセラと同姓である。つまりキンセラその人でさえある。普通なら、架空の名前を用いるところである。このキンセラの直截性というか、そのままずばりと本質に突入してゆく体質は、まことに独自のものであり、これを可能ならしめているのは、既述のように、彼の真摯な、そしてあたたかい心の姿勢であり、夢や理想に向かって一途に邁進し、肉迫せんとするその心意気、情熱なのである。要するに、彼は、自ら生み出した夢の世界、幻想の世界に、彼自身がずかずかと歩み入って、その夢の、幻想の世界を確かなものにしようとさえしているのである。

クーパーズタウン（Cooperstown）にある野球の殿堂（National Baseball Hall of Fame and Museum）の資料室長（historian）クリフォード・カクライン（Clifford S. Kachline）氏の作中への何気ない、氏そのままの登場にも作者の思い切りのよさ、それも意外性を伴った思い切りのよさを感じる。筆者自身、カクライン氏とはかつてクーパーズタウンで直に会ったことがあり、その後も長年にわたって文通を続けている人である。そうした人物が、そのままの名前で、ごく自然な形で主人公やサリンジャーの前に現れるということは驚きである。これまたこの小説におけるリアリズムの質を説明する好例のように思える。作中で、主人公のレイ・キンセラとサリンジャーが会ったカクライン氏は、次のように描写されている。

> 資料室長に面会を求めると、長い階段をあがったところへ案内される。クリフォード・カクラインが現れて愛想よく迎えてくれる。痩せ型の柔和な人物で、新聞紙のように青ざめた顔をしているが、ほのぼのとした暖か味があって、たちまちうちとけた気分にさせてくれる…
>
> 『シューレス・ジョー』III
>
> 永井　淳　訳

> We ask to see the historian and are ushered up a long curving flight of stairs. Clifford Kachline appears and greets us warmly. He is a slight, soft man, pale as newspaper, but there is an aura of warmth about him and he puts us instantly at ease.
>
> *Shoeless Joe*, III

まさに15年ばかりも前に筆者の会ったカクライン氏そのままである。

カクライン氏は、アメリカ野球協会（Society of American Baseball Research）の創立にもかかわった重要な人物であり、数年前に『朝日新聞』紙上にも写真入りで登場したことのあるアメリカの野球界の重要な知識人の一人なのである。とりわけこの人物とサリンジャーの出会いという設定は、特に筆者などには極めて興味深い。

作者が自ら半ば公然と作中人物となって作品世界の中に入ってゆく手法といい、カクライン氏がいきなり現れてくることといい、それらは究極の現実の幻想世界の中への闖入である。そう言えば、見方によっては、J. D. サリンジャーが彼自身の引きこもったニューハンプシャーの家から出て来て、ボストンのフェンウェイ球場（Fenway Park）やクーパーズタウンの野球の殿堂、ミネソタ（Minnesota）のチザム（Chisholm）や同じミネソタのミネアポリス（Minneapolis）のツインズ・スタジアム（the Twins ' stadium)、或いはアイオワのトウモロコシ畑に現れるということ、そのこと自体が現実そのものの侵入と言えなくもないのである。しかも大切なことは、キンセラ世界におけるこのような現実そのものの侵入が、決して違和感を生まないということである。既に指摘もしたように、それは、彼の作り出した架空の世界と見事に融合しているのである。

ニューヨーク州の田舎にあるクーパーズタウンという町は、アメリカにおける野球発祥の地として最有力候補地とされているところである。その名の由来は、あの『モヒカン族の最後』（*The Last of the Mohicans*, 1826）の作者として知られる19世紀前葉のアメリカの文豪ジェームズ・フェニモア・クーパー（James Fenimore Cooper, 1789—1851）の父親ウィリアム・クーパー（William Cooper）にある。即ち、この町は、ウィリアム・クーパー率いる一団によって切り開かれた辺境の開拓町なのである。因みに、町の中の、野球の殿堂の近くにある小じんまりとしたクーパー公園（Cooper Park）には、文豪J・F・クーパーの銅像が見られる。また、美しいオッツェゴ湖（Otzego Lake）畔に再現された開拓村のそばにはクーパー家の立派な館が今は記念館となって残っている。内部ではウィリアム・クーパーの肖像画なども見ることができるのである。この町に今日も残る古い小

ニューヨーク州クーパーズタウンの野球の殿堂（National Baseball Hall of Fame and Museum)。1984年、筆者撮影。

さな野球場とのちに建てられた有名な野球の殿堂が、この土地の野球発祥地としての正統性を主張しているものなのである。そしてこの由緒深いクーパーズタウンという土地は、“野球狂”の作家キンセラにとり絶対に無視することのできない「聖地」なのであり、彼が実際に、そして作中では主人公レイが愛妻アニーと、また別の時にはサリンジャーとともにわざわざ訪れるところなのである。

クーパーズタウンそれ自体も、マサチューセッツ（Massachusetts）州のボストンのフェンウェイ球場（ボストン・レッド・ソックス（Boston Red Sox）の本拠地として有名なところ）やカナダ国境に近いミネソタ州チザム、同州ミネアポリスのツインズ・スタジアムなどともども、作者キンセラのよく知る生のままの現実そのものなのである。

4．

この私小説とも幻想小説とも、またそれらの融合物とも言える作品のストーリーは、作者の分身とみなしてよいレイ・キンセラが、既述のようなお告げの如き声に促されて、自身の大切なトウモロコシ畑の一部を野球場に作り変えてしまうことから始まっている。主人公レイの今は亡き父親も野球狂だった人物であり、シカゴ・ホワイト・ソックスやシューレス・ジョー、そしてそのジョーも絡んだ1919年のワールド・シリーズの八百長事件などは、レイが子守歌代わりに育ったものばかりである。レイは、愛する妻アニー（Annie）と一人娘のカリン（Karin）と 3 人で、トウモロコシ畑に作った野球場で、ジョーや他の有名選手たちの亡霊たちが行う試合を観戦し、ジョーたちとの会話も楽しむのである。

「おれは野球を愛していた」とシューレス・ジョーは続ける。「おれは食うために野球をやらなきゃならなかった。ほんとはただで野球をやって、ほかの仕事で食いたかった。肝心なのは試合、球場、匂い、音だった。あんたはバットかボールに顔を近づけたことがあるかい？ニスの匂い、皮の匂い。それから観客、打球が遠くへ飛んだときに一体となって盛りあがる観客の興奮。その音はまるでコーラスだった。それから駐車場の車の音、ロビーには真鍮の痰つぼ、部屋には真鍮のベッドがあるホテル。そういうものについて話すだけで、おれは生まれてはじめてダブル・ヘッダーを見に行く子供みたいに体じゅうが疼き出すんだ」

アニーと結婚した年、はじめてこの農場を借りた年、ぼくはアニーのために庭を掘った。機械を使わずに、軟い黒土を踏鍬で掘りおこして、セールスマンの手にまめを作った。仕事をおえたあとで雨が降ってきた。ホースでお湯を撒くようなやさしいアイオワの春の雨だった。…両手を土に埋めたまま、指で土をこねているうちに、一人の人間が一片の土地を愛しうる限界まで自分がアイオワを愛していることを悟った。

・・・

「太陽はどうなったんだい？」とシューレス・ジョーは球場を囲む照明灯の列を指さしながら、ぼくに問いかける。

「メジャー・リーグの球場で照明灯がないのはリグレー・フィールドだけなんだよ」と、ぼくは答える。「球団のオーナーたちはナイターのほうが客の入りが多いことに気がついたんだ。今じゃワールド・シリーズまで夜やるんだよ」

ジョーは口をすぼめて考えこむ。

「ボールが見にくいな。とくにホーム・プレートあたりがよく見えない」

「急激な変化が起きるときは、概して選手に不利な方向に変わることが多い。そうじゃないかな？しかしあんたは今のところ三の三を打ってるじゃないか」と、ぼくは彼のユニフォームを見おろしながらつけくわえる。大きなSの上段のくぼみにO、下段のくぼみにXを抱きこんだ胸のマーク、そして左袖の肘近くに四十八個の星をあしらったアメリカ国旗がついているホワイト・ソックスのユニフォームだ」

ジョーはにやりと笑って答える。「ボールにさわらしてくれるんなら悪魔のチームでだって野球をやるよ。やれといわれたら真暗闇のなかでだってプレーするさ」

ぼくは1951年12月のあの日のことをたずねてみたいと思う。彼があと数年長生きしていたら事情は変わっていただろう。彼の名誉を回復しようという動きがあったのだが、それも彼と一緒に死んでしまった。ぼくは質問したかったのだが、本能の命ずるままに思いとどまった。世の中には知らずにすますほうがいいこともある。

『シューレス・ジョー』Ⅰ

永井　淳　訳

“I loved the game,” Shoeless Joe went on. “I'd have played for food money. I'd have played free and worked for food. It was the game, the parks, the smells, the sounds. Have you ever held a bat or a baseball to your face? The varnish, the leather. And it was the crowd, the excitement of them rising as one when the ball was hit deep. The sound was like a chorus. Then there was the chug-a-lug of the tin lizzies in the parking lots, and the hotels with their brass spittoons in the lobbies and brass beds in the rooms. It makes me tingle all over like a kid on his way to his first double-header, just to talk about it.”

The year after Annie and I were married, the year we first rented this farm, I dug Annie's garden for her; dug it by hand, stepping a spade into the soft black soil, ruining my salesman's hands. After I finished, it rained, an Iowa spring rain as soft as spray from a warm hose. The clods of earth I had dug seemed to melt until the garden leveled out, looking like a patch of black ocean. It was near noon on a gentle Sunday when I walked out to that garden. The soil was soft and my shoes disappeared as I plodded until I was near the center. There I knelt, the soil cool on my knees. I looked up at the low gray sky; the rain had stopped and the only sound was the surrounding trees dripping fragrantly. Suddenly I thrust my hands wrist-deep into the snuffy-black earth. The air was pure. All around me the clean smell of earth and water. Keeping my hands buried I stirred the earth with my fingers and knew I loved Iowa as much as a man could love a piece of earth.

・・・

“What happened to the sun?” Shoeless Joe says to me, waving his hand toward the banks of floodlights that surround the park.

“Only stadium in the big leagues that doesn't have them is Wrigley Field,” I say. “The owners found that more people could attend night games. They even play

the World Series at night now."

Joe purses his lips, considering.

"It's harder to see the ball, especially at the plate."

"When there are breaks, they usually go against the ballplayers, right? But I notice you're three-for-three so far," I add, looking down at his uniform, the only identifying marks a large *S* with an *O* in the top crook, an *X* in the bottom, and an American flag with forty-eight stars on his left sleeve near the elbow.

Joe grins. "I'd play for the Devil's own team just for the touch of a baseball. Hell, I'd play in the dark if I had to."

I want to ask about that day in December 1951. If he'd lived another few years things might have been different. There was a move afoot to have his record cleared, but it died with him. I wanted to ask, but my instinct told me not to. There are things it is better not to know.

Shoeless Joe, I

レイは、J. D. サリンジャーの全作品と彼について書かれた文章のすべてを冬の間にアイオワ・シティの図書館で繰り返し読んだ男なのであるが、ある時、『デモイン・レジスター』（*Des Moines Register*）紙上で読んだサリンジャーの野球に関するインタヴュー記事により、「最終回のいとこ同士」（ninth-inning cousins）のような近親関係を想い、はるばるニューハンプシャーまでサリンジャーを連れ出しに車で赴くのである。大体、『マドモワゼル』（*Mademoiselle*）誌1947年５月号に載っているサリンジャーの短篇「ウエスト

ボストンのフェンウェイ球場（Fenway Park）。1984年、筆者撮影。

のない1941年の若い娘」(“A Young Girl in 1941 with No Waist at All”)中に登場する青年の名前がレイ・キンセラ(Ray Kinsella)であり、これは主人公レイと同名である。また、『ライ麦畑でつかまえて』の中に登場するホールデン・コールフィールドの級友がリチャード・キンセラ(Richard Kinsella)と言い、レイの一卵性双生児の兄弟も同じリチャード・キンセラなのである。レイはそこにも一つの「合図、前兆、お告げ」(a sign, an omen, a revelation)を感じ取ったのである。

このようにして、レイは、“拳銃で脅かして”強引に連れ出したジェリー(サリンジャー, Jerry (Salinger))とボストンのフェンウェイ球場、クーパーズタウン、ミネソタ州のチザムや同州ミネアポリスのツインズ・スタジアムなどを経て、アイオワの農場に帰ってくる。この奇妙な二人の車の旅の描写に作中相当の頁数が割かれている。その過程で、エディ・シズンズ(Eddie Scissons)老人のことや彼がかつてシカゴ・カブス(Chicago Cubs)でプレーしていたという、実際には老人の作り話だったはなしが、また、彼からレイが農場を購入した話などが語られる。チザムの老医師ドック・グラハム(ムーンライト・グラハム)のことも沢山のことが語られる。チザムでレイはドック・グラハムと会えるのであるが、その時、ドックは、マイナー・リーグの野球選手時代に、ある月夜の晩一人で球場に出向いたことから“ムーンライト・グラハム”(Moonlight Graham)というニックネームをもらったことなどを懐かしく語るのである。チザムはドック・グラハムが46年間医者として住みついた町なのである。驚くべきことに、若い野球選手ムーンライト・グラハム(ドック・グラハムの選手時代の亡霊)がチザムを発とうとするレイとサリンジャーの車に同乗して来て、三人そろってアイオワの農場へ帰ることになるのである。

かくして、レイ、サリンジャー、グラハム青年そしてエディ・シズンズ老人(キッド・シズンズ(Kid Scissons))たちは、レイの農場で、アニーやカリンともども、トウモロコシ畑の野球場へ赴くことになるのである。やがて、グラハム青年は、亡霊たちの試合の一員となって、一同と別れてグラウンドに下りてゆくことになる。また、レイの一卵性双生児の兄弟リチャードが観戦者の一人として加わることにもなる。ジプシーの愛人ともどもに。

リチャードは、かつて父と争った後、家を飛び出してしまった男で、その後旅まわりのカーニヴァルの一員となっており、その一座はたまたまアイオワのこの地方でショーを催しているところである。リチャードは、ジプシー女とともに、見世物小屋のトレーラーを持っている。

重要なことは、トウモロコシ畑の野球場の亡霊たちの姿や彼らの行う試合は、見える人たちには見えるが、見えない人たちには見えないということである。レイ・キンセラ一家やサリンジャー、シズンズ老人、ジプシー女たちには見える。が、レイの妻アニーの兄マーク(Mark)やその仲間ブルースタイン(Bluestein)たちには全く見えない。つまり、純粋な心の持主で、夢を抱き、それを楽しみ、慈しめる類(たぐい)の人たちには幻想の世界が見え、現実主義、俗物根性に凝り固まった利己主義者たちにはその世界が見えないのである。作者キンセラは、この世の人間を二つの種類に類別しているわけである。この点、リチャードはまだ中間地帯に位置しているという印象である。

5．

『シューレス・ジョー』における厳密な意味での「夢対現実」は、レイ夫妻や彼らの娘カリン、サリンジャー、エディ・シズンズたち対マークやブルースタインたちの対立の構図に浮き彫りにされている。ここでは、現実も現実、むき出しのままの現実そのものがトウモロコシ畑の一角で展開される夢の、幻想の世界と対比されて、描き出されているのである。つまり、マークたちは大農場経営、コンピューター・ファーミングのプランに絡んでいて、その中の邪魔な一点たるレイ・キンセラの土地を買い取りたいわけである。しかしレイ夫妻はそれを決して手離そうとはしない。彼らは、野球場を作ったためにますます少なくなった畑の収穫量では、農場をやってゆけなくなっている。経営危機に陥ってしまっているのである。レイの苦境を察したサリンジャーまでがレイに資金の支援を申し出る始末である。レイを変人扱いするマークたちは、裁判所からもらった農場の保護管理権を盾に、72時間以内に未納分の金を支払うようにと脅すのである。彼らは、エディ・シズンズ老人が60年も前にモンタナ（Montana）のDクラスのチームで一年間、パート・タイムでプレーしただけという事実を調べ出し、エディをも脅迫して、レイの農場の抵当権を売ってくれれば、その事実をばらさない、と言っていた。エディはそれに屈していたのである。エディ・シズンズ老人がシカゴ・カブスのユニフォームを着たまま死去し、その遺体は彼の遺言状に従って、かつては彼の農場だったが今はレイのものであるトウモロコシ畑の野球場の一角に、亡霊選手たちの参加を得て埋葬された。サウスポーのエディもやはり大リーグ選手を夢見た一人であり、不幸にもその夢はかなわなかったが、死後はきっと亡霊選手たちの仲間入りができることであろう。レイたちの父ジョニー・キンセラ（Johnny Kinsella）と同様に。

生前のエディは、レイ自身と同じように、「繻子のようにやわらかく、祖父の膝のように安全な老いぼれ馬の鼻を撫でたがる子供のように我々の内心の願望に手を伸ばしてさわりたいと思う人間」（some of us get to reach out and touch our heart's desire, like a child who gets to pet the nose of an old horse, soft as satin, safe as a grandfather's lap）であった。彼は人生で最も欲するものを得られぬため、過去にそれを持っていたようなふりをし、それについて繰り返し語り、それを自らのものにしてしまおうと考えたのであり、レイにはその気持が、つまり老人がシカゴ・カブスの生残りの最年長者だと自称して来たその哀しい気持がよく分かるのである。エディにとり、野球は宗教のようなもの、神のようなものであり、野球を語る彼は、宗教家の趣を呈するのだった。

エディがレフト・スタンドから語りかける、呼びかける幻想的な場面がある。

「野球という言葉を話しはじめると、その言葉で男や女に話しはじめると、彼らがその生命の流れによって、野球という愛情深い言葉によって変えられることがわかってくる」

「野球という言葉が登場すると、かならずなにかが起きる。きみたちは自分自身の力で、自分自身の光のもとで、野球がなしうることをなすべく期待することはできない」

「われわれは内に言葉を持たなくてはならない。野球という言葉を内に持って、それをきみたち自身の内に豊かに住みつかせなくてはならない。そうすれば世の中へ出て行って男や女に話しかけるとき、きみたちは野球という言葉を話すことができる。それは

かつてだれかがその言葉を話すのを聞いたからではなく、その言葉がきみたちの内に生きているからなのだ」

「…きみたちが外へ出て行って野球という言葉を話すとき、それは精神であり生命である」

・・・

「野球の名を称えよ。その言葉は虜囚を解き放つだろう。盲人の目を開かせるだろう。死者をして立たしめるだろう。きみたちのなかに野球という言葉は生きているか？野球という言葉はきみたちの血となり肉となったか？永久にそれを生き、プレーし、消化しつづけるか？野球という言葉をきみたちの人生とすることを、一人の老人から学べ。世に出て野球を語れ。その言葉が水のようにきみたちの体内を流れるとき、それはきみたちの仲間の渇きを速めるだろう」

『シューレス・ジョー』Ⅳ

永井　　淳　訳

“As you begin to speak the word of baseball, as you speak it to men and women, you are going to find that these men and women are going to be changed by that life-flow, by the loving word of baseball.

“Whenever the word of baseball is brought upon the scene, something happens. You can't go out under your own power, under your own light, your own strength, and expect to accomplish what baseball can accomplish.

“We have to have the word within us. I say you must get the word of baseball within you, and let it dwell within you richly. So that when you walk out in the world and meet a man or woman, you can speak the word of baseball, not because you've heard someone else speak it but because it is alive within you.

・・・

When you go out there and speak the word of baseball— the word of baseball is spirit and it is life.

・・・

“Praise the name of baseball. The word will set captives free. The word will open the eyes of the blind. The word will raise the dead. Have you the word of baseball living inside you? Has the word of baseball become part of you? Do you live it, play it, digest it, forever? Let an old man tell you to make the word of baseball your life. Walk into the world and speak of baseball. Let the word flow through you like water, so that it may quicken the thirst of your fellow man.”

Shoeless Joe, Ⅳ

エディ・シズンズ老人の言葉は、そのままW・P・キンセラの言葉であり、老人の野球哲学はキンセラのそれである。

やがてレイ・キンセラは一つの決断をする。即ち、車のトランクから彼の拳銃を取り出し、マークやブルースタインたちを「ぼくの土地から出て行け！」と言って威嚇するので

ある。そうした騒ぎの中で、カリンがスタンドから落下する。

死ぬかと思われたカリンのところに駆けつけてくるムーンライト・グラハムは、近づくにつれて老ドック・グラハムへと変化する。彼はカリンの口からホットドックの固まりを取り出し、彼女を窒息死から救うが、「ある種の宇宙的規則」(some cosmic rule)を越えてしまったグラハムは、つまり一種の「聖域」たるグラウンドの領域の外側に踏み出してしまったグラハムは、再び若い野球選手に戻ることはできず、妻アリシアが待っているから、と言って、故郷へ帰ってゆくのである。

サリンジャーは、「夢を見た」とレイに言い、中西部へやって来た人々がレイのトウモロコシ畑の中の野球場に目をとめて、寄ってくるだろう、そして心の平和を得るために金を払って外野スタンドに腰を下ろすだろう、…と言う。

「きみにはいうまでもないだろうが、長い年月まったく変わらないもののひとつが野球だった。アメリカは黒板に書かれた文字のように拭い消され、再建されてはまた拭い消されてきた。しかしアメリカがスチームローラーの行進のように通りすぎる間、野球はじっと一か所で足踏みしてきた。それはムーンライト・グラハムが1905年にやったのと同じゲームだ。それはキャラコのドレスや、炻器(せっき)や、戸外テーブルで食事をする脱穀作業班などと同じように、生きた歴史の一部なのだ。野球はひと握りの新しいコインに混ったインディアンの顔の一セント貨のように、かつて存在したものを絶えずわれわれに思いおこさせる」

・・・

『シューレス・ジョー』Ⅳ
永井　淳　訳

"I don't have to tell you that the one constant through all the years has been baseball. America has been erased like a blackboard, only to be rebuilt and then erased again. But baseball has marked time while America has rolled by like a procession of steamrollers. It is the same game that Moonlight Graham played in 1905. It is a living part of history, like calico dresses, stone crockery, and threshing crews eating at outdoor tables. It continually reminds us of what once was, like an Indian-head penny in a handful of new coins."

Shoeless Joe, Ⅳ

サリンジャーが話している間に、車が次々と詰めかけてくる。そしてジプシーが、

「なぜあんなに沢山の車がくるのか、見てくるわ」("I'll go and see what those cars want.")

と言うのである。

作者W. P. キンセラにより妙な登場を強いられたジェリー(サリンジャー)は、結局、この物語の中で重要な役割を果たした後、亡霊選手たちとともにゲートをくぐって、トウ

モロコシ畑の中に去ってゆく。シューレス・ジョーに誘われたのである。サリンジャーにふさわしい退場の仕方である。

主人公のレイ・キンセラとサリンジャーは、物語を通じて、あたかもキャッチボールをし合うかのように、２人３脚よろしく米大陸を旅し、作者キンセラの夢や願望の意味を、トウモロコシ畑の中の野球場（スタジアム）に象徴される夢と幻想の世界の意味を考え続けて来たと言える。二人が考え続け、追い続けて来たものは、レイにとっては、モンタナ州に住んでいた子供時分、彼に「野球の悪魔」（a baseball devil, サリンジャーの言）を取り付かせた父親、その父親の思い出に通じるものでもあった。

レイ・キンセラの亡くなったその父親も、亡霊選手たちに交じってやってくるのである。8番のキャッチャー、ジョニー・キンセラである。彼はかつてフロリダとカリフォルニアでマイナー・リーグ（minor league）の試合に出場していたBクラスのキャッチャーである。レイの夢がかない、父は終に大リーガーの仲間入りをして、この野球場でプレーしているのである。レイとリチャードの兄弟は、父親のことを、「見事なキャッチャー振りだ」（I dmire the way you catch a game of baseball.）と言うのだった。

ともかく、レイが野球場を作った動機の一つに、野球選手としてのこの父親の生前の願望がこめられていたということが言える。

６．

ケヴィン・コスナー（Kevin Costner）主演の映画『フィールド・オブ・ドリームズ』（Field of Dreams）は、言うまでもなく、小説『シューレス・ジョー』に基づいて製作されたものである。それも原作にかなり忠実に作られていると言ってよかろう。作家サリンジャーが映画の中では黒人作家のティレンス・マン（Terence Mann）に変えてはあるものの。

とは言え、原作の世界が映画よりもはるかに内容豊かであることは、当然のことである。気のきいた比喩的表現の多い、生き生きとした文章でつづられたこの作品は、既に述べた通り、夢多き想像力に満ちたW. P. キンセラの手になる一種の幻想小説の趣を見せている。それは、本作が野球（ベースボール）をテーマにしていることとも合わせて、極めてアメリカ的な文学作品であることを例証してもいる。既に触れたような現実と夢の不可思議にも自然な融合振りは、まず何よりもキンセラ独自の特質であると言えるが、同時にそれは優れてアメリカ的な世界がそこに展開されているということでもある。W. P. キンセラは、野球に仮託されたアメリカ人の英雄願望や理想主義（アイディアリズム）、輝かしい過去の懐かしい回想や未来にかけての発展や安寧への志向、…等々を歴史的展望やノスタルジックな感懐、家族や肉親の情愛、理解し合える友人たちとの同志的連帯関係などを交じえつつ、探究していったのである。

キンセラの沢山のカナダ・インディアンものの短篇の中の代表的作品の一つ「ダンス・ミー・アウトサイド」（“Dance Me Outside”）においても、もう子供を生んだことのある18才のリトル・マーガレット・ウルフチャイルド（Little Margaret Wolfchild）が殺害されるが、犯人とされた白人クレアランス・ギャスケル（Clarence Gaskell）はまやかしの裁判でたったの90日間の拘留と500ドルの罰金で済むことになる。結局、刑務所から出て来たクレアランスへの復讐をフランク・フェンスポスト（Frank Fencepost）やロバー

ト・コヨーテ（Robert Coyote）らインディアンの男たちが実行する前に行ったのはインディアンの女性仲間たちだった。女たちは、夜のダンスの会場で、クレアランスをホールの外のダンスに誘い出し、ひそかに殺したのである。女たちはしめし合わせて男たちの急場を救ったわけでもあった。そして証拠も始末される。こういう話なのであるが、このほんの一短篇の中にもキンセラの特徴がよく見てとれる。それは即ち、弱者（この場合は白人社会から差別されるインディアンたち）への同情、強者たる悪質な白人やその支配体制への弱者インディアンの反撥への理解、公的悪を蔭でやっつける小気味よい正義感、弱者の側の連帯、…等々である。更には、ストーリーのテンポの早い、すみやかな運び振り、キンセラ風のアイロニーやユーモアによる味つけなども印象的である。切れ味のよい、小気味よくすかっとした短篇で、内容と構成の面で、作者の感性と技量の確かさを感じさせられる。そして何よりも作品全体からほのかな人間味、あたたかみを感じさせられるのである。

長短の違いはあるが、『シューレス・ジョー』もこの短篇も相互に相通じるものがあり、ともにいかにもキンセラらしい作品である。

7．

結局、作者キンセラの得意とする野球小説の形をとって物語られたこの作品の世界において見出せるものは、アメリカ人の心の故郷（ふるさと）の如きものであろう。作品の終盤において、見える人たちには見えるあのトウモロコシ畑の野球場を目指して、そこのレフト・スタンドを目掛けて続々とやってくる車の列、その中にはニューヨーク州のナンバー・プレートも見られれば、オハイオ州のナンバーをつけた車もある。…

現代アメリカ人の渇望するもの、それがこのアイオワのトウモロコシ畑にある。あらゆる打算を取り払った、素晴らしい誠（まこと）、そして心の平穏、すべてのアメリカ人が子供の頃は持っていて、その後捨て去り、忘れ去った美しい夢、あたたかい友情、真実の愛、深い思いやり、互いの理解や赦し、…等々、それらがこのささやかな野球場（スタジアム）という器（うつわ）に盛りこまれ、象徴的に再現されているのである。つまりはあのサリンジャー的なものが、あの『ライ麦畑の捕手』的な探究物が、多勢の人々にとって心打つものが、この小球場に凝集されているのである。『シューレス・ジョー』の名作たるゆえんはそこにあるのであり、W. P. キンセラが彼の精通する野球というある種古典的で、そして極めてアメリカ的な題材を生かし切ったことが、この作品の成功の最重要の要因ともなっているのである。